

# アタッチメントと反社会性

—その理解と支援—

平野 慎太郎

## はじめに

第二次大戦中 Bowlby (1944) は、戦争孤児となって施設への長期入所を余儀なくされ、養育者との長期間の分離を体験し、安定した世話人を得られない少年たちを観察した。彼らに共通する問題行動は盗癖であり、それが安定したアタッチメント関係の欠如によるひとつの帰結であることを Bowlby は見出した。アタッチメント理論はその出発点から、反社会性と密接な繋がりを持っていたが、その後のアタッチメント理論は犯罪心理学領域ではなく、発達心理学領域の中で発展を遂げていった。1980年代になり、親から子どもへの虐待や、成人において主要なアタッチメント対象である配偶者や恋人間で生じる暴力（親密な関係における暴力）という現象をアタッチメント理論によって理解することが試みられ (Bowlby, 1984), アタッチメント理論を犯罪・司法領域の中で利用しようとする動きが活性化した。アタッチメント理論は子どもと養育者の関係を観察することによって実証的な知見を積み上げてきたが、思春期や成人の臨床的問題にも深く関与している (三原, 1999)。犯罪もそのひとつである。本稿では、これまで日本の司法臨床領域で注目される機会の少なかった、アタッチメントと反社会性との関連についての研究を概観する。ここにおける反社会性とは、反社会性パーソナリティのようなパーソナリティ傾向や障害から、暴力、殺人、物質依存、ストーキングのような罪種を含んでいる。アタッチメントと反社会性の関連についての研究のほとんどは、これらのパーソナリティ傾向や反社会的行為ごとにアタッチメントとの関連が検討されており、本稿でもその主題ごとに先行研究を整理していくこととする。そして犯罪者に対する臨床について、アタッチメント理論からの理解を試みた研究を概観し、今後の研究の展望を述べたい。

## 1. アタッチメントの理論と測定

まず Bowlby (1970 黒田他訳 1991, 1973 黒田他訳 1981, 1988 二木訳 1993) が提唱したアタッチメント理論について概説し、それからアタッチメントの実証的研究で用いられる、個人のアタッチメントを測定する手法について述べる。

子どもは不安や危険を感じると、作動したアタッチメント・システムに導かれ、安心基地 (Secure base) である養育者への接近や接触を通して不安の解消を求める。応答的な養育者は、自らに向けられる子どもの欲求を受け入れ、子どもが不安を感じて養育者にくっついたり、それによって安心して再び自律的に養育者から離れて探索行動に戻ったりする距離の調整を受けられる。これらの相互作用は幾度となく繰り返され、子どもに発達しつつある認知的・情緒的・行動的なシステムへと組み込まれていく。自らの不安に応答的に反応されるという体験を十分に得られた子どもは、次第に養育者による自己の取り扱いを内在化し、自ら不安に対処したり、養育者が子どもにそうしたように子ども自身も自己や他者の心を推し量ることができるようになることなど、様々な心理的健康を獲得することができる。こうして内在化された養育者との相互作用の表象は、内的作業モデル (Internal Working Model) と呼ばれ、不安時に他者の助けを得るために必要な行動プランを描くための枠組みとなる。これらは安定したアタッチメントの個人についての描写であるが、不安定なアタッチメントもまた存在し、それはしばしば精神的不健康や精神病理、問題行動の要因として議論される。

そうした個人のアタッチメントの状態を測定する手法には、主に1歳児を対象にしたストレンジ・シチュエーション法 (Ainsworth, Blehar, Waters, & Walls, 1978), 半構造化面接である成人アタッチメント面接 (Main & Goldwyn, 1984) (以下, AAI とする), 質問紙 (Hazan & Shaver, 1987; Bartholomew & Horowitz,

Table 1. AAIによって分類される各アタッチメント・タイプの特徴

アタッチメント軽視型 (dismissing/detached type)
自分の人生におけるアタッチメント関係の重要性や影響力を低く評価するタイプ。表面的には自分の親のことを理想化し、肯定的に評価したりもするが、親との具体的な相互作用やエピソードについてはほとんど語ることがなく、潜在的に、親あるいは他者との親密な関係を避けようとしていることがうかがえる。軽視型はアタッチメント・システムを活性化させないという方略を取っており、それは非活性化方略と呼ばれ、アタッチメント関連の内的・外的手がかりへの気付きを最小限にすることを目的にしている。
安定自律型 (secure autonomous type)
過去のアタッチメント経験が自分の人生や現在のパーソナリティに対して持つ意味を深く理解しているタイプ。自分のそれまでのアタッチメント関係の歴史を肯定的な面、否定的な面併せて、整合一貫した形で語ることができる。他者および他人を深く信頼しており、対人関係は全般的に安定している。
とらわれ (纏綿) 型 (preoccupied/enmeshed type)
自分のアタッチメント関係の歴史を首尾一貫した形で語るができず (語る内容に矛盾が認められ)、自分の過去、とくに親が自分に対してとった態度等にいまだに強いこだわりを持っている (深くとらわれている) タイプ。自分の親について語る際に時に激しい怒りを示すことがある。他者との親密な関係を強く切望する一方で、自分が嫌われるのではないかと、見捨てられるのではないかとという不安を抱いており、対人関係は全般的に不安定なものになりがちである。とらわれ型はアタッチメント・システムが過剰に活性化し、過活性化方略を取っており、自身の情緒的な調節が難しく、強い不安を示して他者にしがみつく。
未解決型 (unresolved type)
過去にアタッチメント対象の喪失や被虐待などのトラウマ体験を有し、それに対していまだに葛藤した感情を抱いている (心理的に解決できていない)、あるいは「喪 (mourning)」の過程から完全に抜け出していないタイプ。時に発話の中に非現実的な内容が入り交じる (例えば、死んでしまった人がまだ生きているかのように話すなど) ことがある。

遠藤 (2007), Wallin (2007 津島訳 2011) を参考に作成。

1991; Brennan, Clark, & Shaver, 1998) などがあり、それぞれによって捉えられるアタッチメントの側面が異なっている。AAIによるアタッチメント分類を Table 1, 質問紙によるアタッチメント・スタイルを Figure 1 に記した。先に触れた不安定なアタッチメントは、Table 1 においては軽視型、とらわれ型、未解決型であり、安定したアタッチメントは安定自律型である。AAIによる分類は、軽視型、安定型、とらわれ型の3分類で分類する場合と、そこに未解決型を加えて4分類で分類する場合がある。一方 Figure 1 は、質問紙において捉えられるアタッチメントの分類であり、質問紙による分類はアタッチメント・スタイルと呼ばれる (遠藤, 2007; 中尾・加藤, 2004)。親密性の回避因子と見捨てられ不安因子の得点の高低が計測され、かつその組み合わせによって個人のアタッチメントを分類することができるものもある。質問紙を用いて個人のアタッチメントを分類しようとする社会心理学者の想定するところによれば、AAIと質問紙の各分類は一致しているものと見なされる。Table 1 の安定自律型は Figure 1 の安定型、軽視型やとらわれ型もそれぞれ対応し、未解決型と恐れ型も対応する分類として推定されている。しかしながら、例えば Shaver, Belsky & Brennan (2000), Simpson, Rholes,

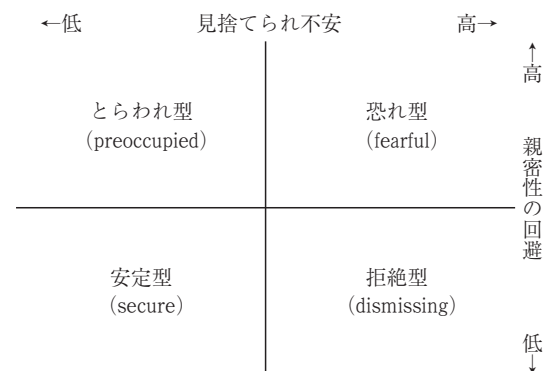


Figure 1. アタッチメント・スタイルの分類 (Brennan et al. (1998) を参考に作成)

Oriña, & Grich (2002), Roisman, Holland, Fortuna, Fraley, Clausell, & Clarke (2007) によると、AAIによるアタッチメント分類と、質問紙によって分類されたアタッチメント・スタイルの間の関連は、ほとんど実証されていない。したがってアタッチメントと反社会性に関する研究においても、例えば同じ軽視型という言葉が使われていても、使用されている測定法がAAIなのか質問紙なのか、注意が必要である。

## 2. アタッチメントと反社会性との関連

### 2-1. アタッチメントと反社会性パーソナリティ障害

DSM-5 (American Psychiatric Association, 2013)によると、反社会性パーソナリティ障害とは、社会規範からの逸脱や他者の利己的な利用、無責任さ、良心の呵責の欠如などを有する、犯罪者にしばしば確認されるパーソナリティ特徴である。ここではアタッチメントと反社会性パーソナリティ障害の関連を調査した研究について、臨床群に対するものと、非臨床群に対するもの、そして関連する知見について概観する。

#### 2-1-1. 反社会的パーソナリティ障害患者を対象にした研究

Rosenstein & Horowitz (1996) は、精神科に入院している青年60名を対象に、AAIとパーソナリティ障害の関連を調査した。AAIにおける軽視型24名中11名が反社会性パーソナリティ障害の診断基準を満たしており、対してとらわれ型の場合は28名中2名のみが基準を満たした。Frodi, Dernevik, Sepa, Philipson, & Bragesjö (2001) や Levinson & Fonagy (2004) による受刑者を対象にした研究においても、多くの受刑者が軽視型に分類された。これらの研究を踏まえると、反社会性パーソナリティ障害と関連が深いアタッチメント分類は軽視型であり、アタッチメント・システムの最小化方略を取るがゆえに対象の重要性を軽んじ、反社会性パーソナリティ障害のような振る舞いを示しているものと考えられる。

一方、van IJzendoorn, Feldbrugge, Derks, De Ruiter, Verhagen, M, Philipse, Van der Staak, & Riksen-Walraven (1997) による司法精神病院に入院した40名の暴力犯罪者を対象にした調査では、入院した犯罪者におけるアタッチメント分類は、4分類の場合は未解決・分類不能型が非臨床群よりも多く、3分類の場合は軽視型ととらわれ型がほぼ同数であった。彼らの生育歴には親との分離、喪失、被虐待、複数の施設入所経験があり、半数がなんらかのパーソナリティ障害に分類され、そのうちの6名(27%)が反社会性パーソナリティ障害に分類された。さらに反社会的パーソナリティの患者は治療スタッフとの間で支配的関係を築きやすい傾向が示された。暴力犯罪者すべてが反社会性パーソナリティ障害の診断基準を満たすわけではないがおよそ半数が該当し、かつ生育歴上の問題を複数体験していた点と、もっとも臨床的に深刻であるとされる未解決・分類不能型が多かったことは、彼らのア

タッチメントの問題の根深さを伺わせる結果であると言える。Fonagy, Target, Steele, & Steele (1997) と Fonagy, Target, Steele, Steele, Leigh, Levinson, & Kennedy (1997) による受刑者に対する調査においてもほぼ同様の結果が得られており、もっとも受刑者に多いアタッチメント分類は未解決型であり、受刑者のおおよそ8割に被虐待経験(特にネグレクト)、アタッチメント対象への苛烈な怒りがあることが確認された。反社会的傾向の高い者は早期に生命ストレスと身体的虐待に関連した状況を経験しており、虐待やネグレクトは神経生物学的な基礎を損なうため、個人のアタッチメント状態も不安定なものになると考えられる(Beech & Mitchell, 2009)。

van IJzendoorn & Bakermans-Kranenburg (2008) は、自身らのこれまでのAAI研究から得られた調査協力者のデータを整理した。それによれば、反社会性パーソナリティ障害のアタッチメント分類は、3分類では軽視型(約52%)>とらわれ型(38%)>安定型(10%)、4分類では未解決型・分類不能(48%)>軽視型(36%)>とらわれ型(16%)>安定型(10%)であった。さらに反社会性パーソナリティ障害のアタッチメント分類をコレスポネンス分析によって検討したところ、3分類において主に軽視型の次元に布置されることが明らかになったが、一方4分類ではとらわれ型と未解決型・分類不能型の中間に布置されることが明らかになった。この研究は、しばしば軽視型の傾向があると指摘されていた反社会性パーソナリティ障害の、より深い理解をもたらしたと言える。反社会性パーソナリティ障害は単に対象を軽視しているがゆえに起こるといふより、アタッチメント・システムの組織化が欠落しており、養育者との関係に未解決な、外傷的なものを有していることが問題となるのだと考えられる。臨床群に対する質問紙調査では、Mauricio, Tein, & Lopez (2007) が教育プログラム参加を義務づけられたDV加害者男性におけるアタッチメントと、境界性・反社会性パーソナリティ障害が、暴力に与える影響を調査した。その結果、アタッチメント不安および回避因子の得点と暴力の直接的関係は弱く、パーソナリティ障害を仲介して暴力と関係したが、アタッチメント不安因子のみ、心理的暴力と直接関係した。Timmerman & Emmelkamp (2006) は、司法精神病院の入院患者と受刑者、統制群との間での比較を行っており、安定型が犯罪への保護因子となり、恐れ型が犯罪のリスク因子となることを見出された。

#### 2-1-2. 非臨床群を対象にした研究

Brennan & Shaver (1998) は大学生1407名を対象に、質問紙によりアタッチメント・スタイルを分類、加えてDSM-III-Rに対応するパーソナリティ障害を測定し、その関連を検討した。反社会性パーソナリティ障害得点は、恐れ型>軽視型>安定型>とらわれ型の順で高く、統計的な有意差は、恐れ型、軽視型、とらわれ型>安定型、であり、AAIのアタッチメント分類と対応させた場合は概ね一致するが、Rosenstein & Horowitz (1996) や van IJzendoorn et al. (1997) らの調査で強調された軽視型とはあまり強い関連を示さなかった。先述したように、AAIによるアタッチメント分類と、質問紙によるアタッチメント・スタイルの一致は認められないことが多く (Shaver et al., 2000; Simpson et al., 2002; Roisman et al., 2007), また被験者が一般大学生という点からも、より重篤な反社会性パーソナリティ障害の臨床群とは異なる結果が得られたのかもしれない。

### 2-1-3. その他の知見について

アタッチメントと反社会性に関する研究として Kochanska, Barry, Stellern, & O'Bleness (2009) は、約100名の子どもの15ヶ月から67ヶ月まで追跡調査し、67ヶ月時点での子どもの反社会性と怒りを伴う反抗、親の関わり方やアタッチメントの影響力を調査した。子どもの反社会性と反抗を予測したのは、親の力の行使 (parental power assertion) と、より早期の段階における子どものアタッチメントの不安定性であった。親の力の行使の極端な例が虐待であるとすれば、反社会性パーソナリティ障害の成人の多くが不安定型アタッチメントであり、かつ被虐待経験を持ち、アタッチメント対象への怒りがあるという結果 (Fonagy et al., 1997) と一致する。

さらに近年、反社会性パーソナリティ障害の治療にあたって、メンタライゼーション (Fonagy, Target, Gergely, & Jurist, 2002) に基づく治療が研究されている。メンタライゼーション (そして後述するリフレクティブ・ファンクション) とは他者の心を読み取る能力であり、“他者の信念、感情、態度、要求、願望、知識、想像、偽り、嘘、意図、計画などを、心に思い描くこと” (Fonagy, et al., 2002) であり、基本的にこの能力の改善や増大を目指すのが、メンタライゼーションに基づく治療 (Mentalization Based Treatment; MBT) である。McGauley, Yakeley, Williams, & Bateman (2011) は、暴力の既往がある反社会性パーソナリティ障害の患者9名に、グループによるMBTを行い、治療効果を検討した。攻撃的な患者は治療を終える6ヶ

月半にかけて順調に攻撃性が減じていったが、易怒性の高い患者は治療の終盤になるまで変化が見られず、怒りの問題がある患者は、よりメンタライゼーションの重篤な問題を有しているものと考えられる。反社会性パーソナリティ患者の攻撃的行動 (特に暴力) は、自己の感覚や情動、また他者の考えや意図などを理解するために必要なメンタライゼーションの問題によって生じている面があることが考えられ、そこに治療的な介入が期待される。McGauley et al. (2011) も Bateman & Fonagy (2012) も、反社会性パーソナリティ障害の患者の初期のアタッチメント経験において、恥と屈辱感を経験しており、その苦痛から逃れるための防衛として、他者をコントロールしたり、他者を恥づかしいものにしたたり、屈服させることを目指す行動が起こりうると強調している。この恥や屈辱感は怒りを喚起するがしばしば治療の焦点となり、治療を困難にさせるものでありながら、治療者が裏のない誠実さや率直さを持って応じれば、患者は安心感を抱くことができるようになるという。そのようにして、失われた、あるいは獲得できなかったアタッチメント対象への信頼感や、当初は拒否あるいは攻撃されていた適切なアタッチメント関係を築けるようになること、そしてメンタライゼーションを育むことが、反社会性パーソナリティ障害の治療モデルとして位置づけられる。

### 2-1-4. 結語

反社会性パーソナリティ障害を持つ個人のアタッチメント状態は、軽視型のみならず未解決型・分類不能型の関連が示されており、彼らが外傷的体験や解決できない情緒的混乱を有していることが伺える。臨床においては、反社会性パーソナリティ障害の患者の困難は、アタッチメント分類それ自体よりも、むしろ他者の心を理解すること、心の要素を心に留めておけないことの問題に関心が向けられているようである。いずれにしても、彼らにはアタッチメントにまつわる混乱した体験があり、その影響として内的な体験をそれとして扱えないことの問題が結実していることが考えられる。それらの苦痛な体験を援助してくれる他者を求め続けているところに、犯罪という行動の病理が現実化しているのかもしれない。

### 2-2. アタッチメントと親密な関係における暴力 (Intimate Partner Violence)

親密な関係における暴力とは、成人におけるアタッチメント対象である配偶者や恋人に向かう暴力を指している。前節のアタッチメントと反社会性パーソナリ

ティ障害に関する記述の中にも親密な関係における暴力に関する研究も含まれているが、親密な関係における暴力よりも反社会性パーソナリティ障害であることに焦点付けられた研究を前節で、暴力に焦点付けられた研究を本節で扱っている。

#### 2-2-1. 親密な関係における暴力の発達史

Mawson (1980) と Bowlby (1984) は親密な関係における暴力を、対象の喪失を回避する目的でもって怒りを用い、相手を自分のもとに留める機能を有するアタッチメント行動であると述べた。したがって暴力とは、単に個体の利己的で攻撃的な行動としてではなく、関係性の文脈にある現象として布置される可能性を示し、その起源に不安定なアタッチメント関係があることを示唆した。

アタッチメント行動の逸脱として暴力を捉えた Mawson (1980) と Bowlby (1984) に対して Fonagy (2003, 2004) は、暴力とは、攻撃性が主張性として発達することの失敗であり、つまり健康的な攻撃性からの逸脱として理解できると述べている。その失敗に関与する要因が、母親からの拒否や、母親からの強制的な主張であり、罪悪感の発達が滞り、喚起された怒りによって暴力が生じる。また受刑者を対象にした研究から、他者を心ある存在だと捉える能力であるメンタライゼーションの失敗の帰結として暴力があり、したがってそれは心を否認するという方法で葛藤解決を図る手段であることも示唆されている (Fonagy, et al., 1997; Fonagy et al., 2002)。van IJzendoorn (1997) も、いわば暴力は他者への共感不全の帰結であり、なおかつその起源に拒否的な養育者との経験と、それによる内的表象を見出ししている。Lyons-Ruth, Alpern, & Repacholi (1993) も幼児の無秩序型アタッチメントと母親の抑うつ性が子どもの攻撃性を助長することを指摘している。母親の抑うつは敵対的であったり、押しつけがましかったりする養育態度を促し、そうした養育態度は子どもの回避型アタッチメントに繋がることを指摘している。このような暴力の発達史に関する研究においては、養育者の拒否的態度が強調されている。

Ayoub, Fischer, & O'Connor (2003) は暴力的な男性の20年以上におよぶ縦断的事例研究により、深刻な幼児期の被虐待経験は家族の文化と社会的世界との断絶を促進することを示した。断絶とは、子どもが社会に出て自らの家庭を持つ段階になって、社会的には良好な適応を示しながら一方で家族との関係において暴力的に振る舞うという、極端な関係の異常を示すということである。これらの知見からは、養育者の子どもへ

の侵略的関わりは、子どもが成長し、他者と親密な関係を結ぶ際に再演されることが示唆される。同様に、親密な関係における暴力を研究している Dutton は、不安定型アタッチメントがパートナーへの暴力を予測する一因子であり、Dutton の提唱した「虐待的パーソナリティ abusive personality」が関連することを示した (Dutton, 2007; Dutton & White, 2012)。虐待的パーソナリティは怒り、境界性パーソナリティ傾向、アタッチメントの不安定さやトラウマ症状などに特徴づけられた、独特の加虐的なパーソナリティ障害であると Dutton は定義している。その発達には虐待や父親からの拒絶的関与、家族との情緒的関係の欠如があり、幼少期のアタッチメント関係の不全が虐待的パーソナリティを育み、そのいずれもが親密関係における暴力への経路として開かれていることを示唆している。

#### 2-2-2. DV 加害者を対象にした研究

AAI を用いた DV 加害者の調査も行われており、Babcock, Jacobson, Gottman, & Yerington (2000) は、DV のある夫とそうでない夫を比較し、その結果、軽視型、とらわれ型、未解決・分類不能型は DV 夫に多く、安定型が非 DV 夫に多いという結果が得られた。とらわれ型の DV 夫の暴力は、妻による関係からの閉じこもり (黙っていたり、離れていったりすること) から予測され、妻のそうした行動を見捨てられる兆候だと捉えて恐れを感じ、その反応として暴力が生じるのであろう。これは Bowlby (1984) によるアタッチメント理論から見た暴力の理解と一致する結果である。一方軽視型の DV 夫では、妻の防衛性が暴力の前触れとして検出された。この暴力は自らの権利を主張し、妻をコントロールするために行われると Babcock et al., (2000) は考察しており、アタッチメントの状態と暴力の質には特有の関連性があることが示唆された。

さらに Ogilvie, Newman, Todd, & Peck (2014) はアタッチメントと暴力の関連性を明確にすることを目的にメタ分析を行い、AAI 分類や質問紙調査の結果の効果サイズを検定している。AAI を用いた研究においては、犯罪者のほうが非犯罪者よりも不安定型のアタッチメントに分類された。さらに精神障害のある犯罪者と、犯罪のない精神障害者との比較では、前者に軽視型が多く、後者がとらわれ型に寄っていた。質問紙を用いた研究においては、暴力犯罪者は非犯罪者よりもアタッチメント回避が高く、一般人口に比べて安定型アタッチメント・スタイルは少なかった。そして精神障害のある暴力犯罪者は犯罪のない精神障害者に比べて軽視型アタッチメント・スタイルが顕著に多かった

(性犯罪については後述する)。

Kesner & Mckenry (1998) はパートナーへの暴力によって罪に問われ、治療を受けることになった男性を対象に質問紙調査を行った。暴力的な男性はより不安定型アタッチメントの傾向があり、とりわけ恐れ型に分類されることを示した。また暴力的な男性が、妻との関係において支持されていると感じられることが、暴力のリスクの低減に寄与することも見出された (Kesner, Julian, & McKenry, 1997)。さらに、認知行動療法のグループに備えていた逮捕歴のある暴力的な男性において、高いアタッチメント回避は、高い敵対的支配的な対人関係の問題を通して、暴力の深刻さと強い精神的攻撃性に関連した (Lawson & Malnar, 2011)。これはアタッチメントの回避性が親密な関係における暴力で重要な役割を帯びている可能性を示唆している。臨床的には敵対的支配的な対人関係の問題は、具体的に観察しやすい問題であり、支援における治療目標として設定しやすい側面であると考えられる。

これはアタッチメント分類による暴力の発現経路の差異を明らかにしたものであるが、Bakermans-Kranenbug & van IJzendoorn (2009) では、アタッチメント分類によって暴力の向かう対象に差異があることが明らかになった。家族以外への暴力を行った者はAAIにおいて軽視型が多く、家族への暴力を行ったものはとらわれ型が多かった。いずれの暴力群もきわめて不安定なアタッチメントを示しており、アタッチメント関係に向かう強い不安定さ (とらわれ型)、アタッチメント関係を指向しないことによる不安定さ (軽視型) という活性化方略の過不足によって、実態が異なるのだろう。

#### 2-2-3. 非臨床群を対象にした研究

ここまでの研究は受刑者や親密関係の暴力の既往がある者を対象にしたものだが、親密関係にある一般のカップルを対象に質問紙による研究も行われている。例えば Dumas, Pearson, Elgin, & McKinley (2008) は、高いアタッチメント不安の女性と高いアタッチメント回避の男性による、異なるアタッチメント・スタイルのペアリング (“mispairing” と Dumas et al. (2008) は記述する) がもっともカップル間の暴力のリスクを高めることを見出している。これらのカップルでは、自身の快適な対人・情緒的距離や親密さを求めるニードを調整する方略の相違によって暴力が生じているものと考えられる。

#### 2-2-4. 結語

暴力の発達史をめぐる研究において強調されたのは、

拒否的で支配的な養育経験と、軽視型や無秩序型の子ども、未解決型の成人であり、従来の暴力の研究においても重視されてきたのは軽視型であるが、ここまで見てきたように、成人における親密な関係における暴力においては、とらわれ型の影響も無視できるものではない。Babcock et al., (2000) はとらわれ型の暴力を不安や怒りの反応として考察しており、Bakermans-Kranenbug & van IJzendoorn (2009) はアタッチメント分類によって暴力の向かう対象が異なることを見出した。Babcock et al. (2000) はそれらに加えて未解決型・分類不能による暴力への影響も指摘している。暴力という現象を理解するためには、アタッチメント理論が重視する養育者とのアタッチメント関係ばかりでなく、現在のパートナーとのアタッチメント関係、暴力が生起・収束するきっかけや状況、あるいは暴力のサイクルなどに広く注目する必要があると考えられる。

#### 2-3. アタッチメントと性犯罪

##### 2-3-1. アタッチメントの不安定さと性犯罪

性犯罪における加害者と被害者の関係にはいくつかの多様性がある。例えば Smallbone とその同僚の研究では、性犯罪者を強姦者、家族児童への小児わいせつ者、家族以外の児童への小児わいせつ者に分類し、質問紙によるアタッチメント不安因子、回避因子との関連を調査した (Smallbone, & Dadds, 1998; Smallbone & McCabe, 2003)。これらの研究では、どの性犯罪群も母親および父親とのアタッチメント関係が不安定であることが示された。特に強姦者と家族児童への小児わいせつ者において、父親とのアタッチメント関係が不安定であり、かつ父親とのアタッチメント関係が不安定である者ほど被性的虐待経験を有し、自慰を開始した年齢が若かった。Ward, Hudson, & Marshall (1996) は、児童への性的わいせつ者ととらわれ型と恐れ型が多く、強姦者において軽視型が多かったことを報告している。さらに Stirpe, Abracen, Stermac, & Wilson (2006) にも、性犯罪者を同様に分類し、性犯罪のない暴力犯罪者のアタッチメント状態を比較し、家族以外の児童への小児わいせつ者はとらわれ型が多く、強姦者と家族児童への小児わいせつ者は軽視型が多かったことを報告した。この結果は Ogilvie, Newman, Todd, & Peck (2014) のメタ分析に利用されており、性犯罪者のアタッチメント分類の平均効果サイズは中程度の値 ( $d=0.68$ ) を取り、さらに暴力犯罪者との比較では大きな値 ( $d=1.6$ ) を取った。したがってアタッチメント分類によって、性犯罪者の類型に対するアタ

チメント分類の有意差、性犯罪者と性犯罪のない暴力犯罪者に対するアタッチメント分類の有意差が認められたと言えるだろう。

### 2-3-2. 性犯罪を犯すリスクを高める要因

性犯罪者はアタッチメントの安定性に問題があるが、生育史上のあらゆるトラブルや虐待も、性犯罪のリスク因子として重視されている (Rich, 2006; Marshall, 2010)。Marshall (2010) は、家族関係の不全から不安定なアタッチメントの形成、自尊心の低下、社会的スキル、他者への共感性の欠如が生じ、他者を性的快楽の道具として利用するための力と支配性を重視するような傾向が発達することを述べている。不安定なアタッチメントは潜在的な深刻な情緒的孤独の基礎になり、その孤独さは過度の自慰のような性的コーピング (Marshall & Marshall, 2000) の常習化を経て、性犯罪という形式で他者への攻撃を生み出すとしている。Beauregard, Lussier, & Proulx (2004) も、性犯罪者への勃起判定検査 (phallometric test) による調査を行う中で、性犯罪者の多くがネグレクト経験を持ち、幼少期の性的で攻撃的な空想、ごく早期からのポルノの使用、家族内の性的問題などがあることを見出した。また不安定型アタッチメントの小児わいせつ者の性犯罪を、他者との深い関係を避けるパーソナリティ傾向であるスキツォイド・パーソナリティが予測することを見出した研究もある (Bogaerts, Vanheule, & Desmet, 2006)。さらに薬物やアルコールなどの物質使用の問題を併発している性犯罪者は、性犯罪のない暴力的犯罪者よりもとらわれ型に寄っていたが、強姦者と小児わいせつ者との間でアタッチメントに有意差はなかった (Abracen, Looman, Di Fazio, Kelly, & Stirpe, 2006)。性犯罪に関する一連の研究を見る限り、アタッチメントの問題は性犯罪に至る始まりのひとつとして重視されているものの、犯罪に至るまでの間に、主体が性にまつわる様々な出来事や対象、物に触れることの要因も重視されている。

### 2-3-3. 無秩序型、未解決型アタッチメントと性犯罪

性犯罪者のアタッチメントの問題について、アタッチメントと同様にストレスフルな出来事や性的虐待による影響を強調する研究がある一方、性犯罪者のアタッチメントの中核的問題が幼児期の無秩序型アタッチメントであると指摘する研究もある。Burk & Burkhart (2003) は、単にトラウマティックで混乱した対人関係の経験が性犯罪に発展するわけではなく、無秩序型アタッチメントが早期の認知的感情的混乱に端を発する内的な苦痛を和らげるために性犯罪という行動シ

テムを敷設する可能性を指摘している。Baker, Beech, & Tyson (2006) も、未解決型の個人の対人関係は葛藤に満ちており、他者への接近と回避の試みを解決する戦略として性犯罪が採択される可能性を指摘し、通常のアタッチメント分類で性犯罪者のアタッチメント状態を抽出できるのか疑問を投げかけている。

### 2-3-4. 結語

これらの研究から、性犯罪者の生育歴にはしばしば被性的虐待や家庭内の問題があり、そしてアタッチメントが不安定であり、性的興奮と快感が心的苦痛への対処として常習されることを通して、性犯罪へと至る経路が結実していくものと考えられる。しかしそれはいまだ不確定要素の多い単純化したモデルであり、とりわけ性犯罪者の改善や支援について、アタッチメントの観点からモデル化されたものはなく、それは性犯罪者の心の問題の複雑さを思わせる。

## 2-4. アタッチメントと殺人

殺人を行った犯罪者をアタッチメントの観点から直接調査した研究は、それほど多くはない。Turton, McGauley, Marin-Avellan, & Hughes (2001) は、殺人者40名を含む200名以上のハイリスク集団のAAIを分析した。こうした集団においてアタッチメント状態を捉える困難さとして、人生における経験の極端さから生じる問題 (i.e., 語りの極端な逸脱、アタッチメントの蔑視、被虐待、トラウマティックな出来事へのすさまじいとらわれ)、精神疾患や認知的損傷、向精神薬による影響、AAI実施における文脈の問題 (i.e., 嘘や秘匿、言語的スタイル、面接者に向かう行動) がある。ほとんどのサンプルがAAIにおいて分類不能に当てはまり、あまりの病理の深さのために通常の基準では彼らの問題を理解することは難しいのではないかと Turton et al. (2001) は指摘する。Broberg (2001) は Turton et al. (2001) に反証する形で、こうした犯罪者はごく少数であり、犯罪者に特有のアタッチメント分類を新たに追加するとしても、それは犯罪者を対象とする専門家のために設けられるべきであると述べている。これらの研究は、殺人者のアタッチメントの特徴というより、殺人者のアタッチメントを理解することの困難さに注目している。

Craparo, Schimmenti, & Caretti (2013) による殺人者を含めた暴力犯罪者の調査研究では、サンプルのおよそ8割に被虐待経験が見られた。Fonagy et al. (1997) は殺人者を含めたサンプルにおける調査で、AAIにおけるリフレクティブ・ファンクション得点

(reflective function scale)<sup>1)</sup>の中央値で2つのグループに分類した。リフレクティブ・ファンクション得点が低かった群は、被虐待経験を有し、犯罪は殺人や強姦といった深刻な暴力的犯罪であった。アタッチメントに焦点づけた研究ではないが、近藤(2009)は殺人を行った少年らの家庭環境要因に、幼少期の離婚や被虐待経験があることを見出している。さらに親の養育態度として、ネグレクトや強圧的な養育、家族要員間の葛藤関係などを、殺人を行った少年たちは経験していた。

殺人は暴力の一類型でありながら、殺人のない暴力犯罪者と殺人者との間には、大きな違いがあるように思われる。殺人者の病理の理解や治療に対するアタッチメント理論の貢献する余地があるだろうが、その発展は決して容易ならざるものだろう。

## 2-5. アタッチメントとストーキング

アタッチメントとストーキングに関する研究は、学生を対象にしたアナログ研究からパーソナリティ障害や精神病患者を対象にした事例研究、著名人への脅迫行為を行った人物の病跡学的研究にまで及んでいる。

### 2-5-1. ストーカーを対象にした研究

Tonin(2004)はストーキング経験のある受刑者群とそうでない受刑者群、統制群の3群において、アタッチメント・スタイルと親の養育態度の差異を調査した。ストーキング経験のある受刑者はそのほかの2群よりもアタッチメント・スタイルの得点が不安定であり、そしてとらわれ型であるほどストーカー累犯である傾向、そして付きまとった人物が多い傾向があった。親密関係への過度なとらわれや没入がストーキングのリスクになり、ストーキングへと駆り立てるのは不安感の解消を求める欲求の最大化であると考えられる。

Meloy(1996, 1998, 2013)は、ストーカーはしばしば混乱した求愛行動をとっており、対象への接近時においては、自己愛的な空想を妨害されることに伴う恥、それに起因する恐れや怒りを体験していると述べている。それは自己愛的な傷つきへの反応であるが、さらに自分が対象に愛されているという確信を持つ病理(エロトマニア)によるストーカーも存在し、精神病性のものから神経症、Kernbergの言う境界性パーソナリティ構造の範疇にあるものまで含まれているという。Meloyはストーカーとエロトマニアの共通性を指摘し、いずれも異常な接近探索を目指すとらわれ型の極であるとしている(Meloy, 1992, 1996)。ちなみにその対極として、著しい共感性や良心の欠如を示すサ

イコパス(Hare, 1993 小林訳 1996)が深刻な回避型に位置づけられるとしている。ストーカーの付きまといの対象が以前のアタッチメント対象であった場合、暴力のリスクが50%を超えることが指摘されており、ストーカーがその重要な関係性の破綻の脅威に感情的に反応していることが示唆される(Meloy, 2013)。Wilson, Ermshar, & Welsh(2006)は、ストーキング行動をアタッチメントと精神力動の相互作用によって概念化することを試みている。ストーカーは迫害感が強く、それらの受け入れがたい感覚を被害者となる対象に投影していることを論じている。

### 2-5-2. 非臨床群を対象にした研究

一般大学生を対象にした調査にはMénard & Pincus(2012)があり、900名以上の学生に、アタッチメント、被虐待経験、自己愛傾向、アルコール摂取、ストーキングおよびサイバー・ストーキングに関する質問紙を実施した。虐待経験の中でも、とりわけ性的虐待は、男女ともにストーキングとサイバー・ストーキングのリスクを高めることが明らかになった。女性のみ不安定なアタッチメントとアルコール摂取それぞれが、ストーキングのリスクを高めるという結果が示された。

### 2-5-3. 結語

ストーキングはある特定の他者に一方的に接近する行動であり、先行研究ではこの接近行動を、アタッチメント行動と結びつけて考察されている。しかしながらこうしたストーカーの接近行動を、不安の処理を対象との関係で行うことを目的としたアタッチメント行動と同義のものと見なせるのかは疑問が残る。ストーカーの迫害感の対象が自己と分離することへの怒りや否認であり、したがってストーキングは接近探索というよりもむしろ対象の支配を目的とした行動である可能性も考えられる。ストーキングの対象が必ずしもアタッチメント関係にあった他者ではない場合もあり、ストーカーとその対象になった人物との関係性にも注目する必要があるかもしれない。

## 2-6. アタッチメントと物質使用(薬物, アルコール)

### 2-6-1. 非臨床群を対象にした研究

Brook, Whiteman, & Finch(1993)は、10年にわたって397名の子どもの対象に、攻撃性とアタッチメント、そして幼少期の攻撃性から発展するとされる青年期時点での反抗性、責任感のなさ、社会的に逸脱することに耐える力の3因子からなる非慣習性(Unconventionality)が、のちの薬物使用に影響するかどうかを調査した。結果、13~18歳時点での不安定なアタッチ



メントは、非慣習性に正の影響を及ぼし、続いて物質使用にも影響した。またアタッチメントの不安定さや物質使用は、さらに1年半から2年後のアタッチメントの不安定さと物質使用に影響し、小さい変化で維持されていた。不安定なアタッチメントはのちの物質使用を予測する指標であると考えられ、さまざまな反社会性の種となりうる非慣習性を予測する指標として期待されることが明らかになった。さらに Kassel, Wardle, & Roberts (2007) は、大学生を対象に、質問紙によるアタッチメント・スタイルとアルコールやマリファナ、喫煙の頻度、ネガティブ感情のコーピングとして使用したかどうかを尋ね、その仲介変数として抑うつ状態に類似した非機能的態度 (Dysfunctional Attitude) と自尊心を設定した。それによると、アタッチメント不安は、ネガティブ感情のコーピングとしての喫煙とアルコール摂取に直接的な関連を示し、非機能的態度と自尊心を仲介することですべての物質使用の頻度とコーピング使用に影響した。自尊心は物質使用に対する保護因子となることが考えられるが、高いアタッチメント不安はネガティブな感情状態への対処可能性を減じ、抑うつ感の解消のための物質使用を動機づけると考えられる。Rapoza & Baker (2008) は大学生の親密なカップルを対象に、アタッチメント・スタイルと身体的被虐待経験、アルコール使用の関連を調査した。アタッチメント・スタイルは男女それぞれの身体的被虐待経験のある群とそうでない群との間で有意差は見られなかったが、アルコール摂取頻度は身体的被虐待経験群が有意に高く、心的な葛藤や親密関係上の問題を解決するための手段としてアルコール摂取が常習化していく可能性はあるだろう。

#### 2-6-2. 臨床群を対象にした研究

上記の研究は学生を対象にしたアナログ研究であるが、Finzi-Dottan, Cohen, Iwaniec, Sapir, & Weizman (2003) は、麻薬常習者の夫約50名とその妻のアタッチメント・スタイルと、夫婦の凝集性と適応性、薬物依存の関連を調査している。麻薬常習者の夫は、有意に回避型が多く、また夫が安定型であるほど夫婦の凝集性と適応性を高め、夫婦ともに不安・アンビバレント型であった場合にもっとも凝集性と適応性が損なわれていた。不安・アンビバレント型が夫婦関係の破綻のリスクを帯びている一方、回避型は薬物依存のリスクでもあり、安定したアタッチメントは親密関係の維持と薬物依存からの回復に寄与する可能性が示された。

質問紙ではなく AAI を用いた研究も行われており、Fonagy, Leigh, Steele, Steele, Kennedy, Mattoon, Tar-

get, & Gerber (1996) は、精神科患者において、物質使用のある患者37名のうち、とらわれ型が23名ともっとも多かったことが報告しており、関係への不安や葛藤の解決のために物質使用が常習化していることが考えられる。関係性の中で不安は解消されず、生理学的な刺激を取り入れることによる解消が指向されており、ともすれば物質それ自体がアタッチメント対象として布置されているのかもしれない。

森田 (2012) はアタッチメントと物質使用障害に関する研究を広範にわたってレビューし、物質使用障害はアタッチメントの問題による精神的・対人的問題を補償している病態であると述べている。また物質使用障害の援助のために、内的な安心基地を確立することの重要性を強調している。

#### 2-6-3. 結語

不安定なアタッチメントは物質使用のリスクとなりうることは、非臨床群への研究でも臨床群への研究でも示唆されている。臨床群においては、質問紙で軽視型と、AAI でとらわれ型との関連が顕著であった。意識的にはアタッチメント欲求を価値下げし、アタッチメントに関する不安をなかったことにしようとするが、より無意識的にはアタッチメント関係への不安が強く渦巻いており、それらの不一致への対処として物質使用が選択されるのかもしれない。物質使用の背景にあると思われる内的な問題に焦点を当てる必要があるだろう。

#### 2-7. アタッチメントと窃盗

窃盗は、日本における交通関係を除く全犯罪の認知件数の7割を占める犯罪である (法務省, 2012)。Judy & Nelson (2000) は14歳から18歳の学生を対象に、両親の養育態度と窃盗尺度との間の関連を調査した。その結果、養育態度と窃盗との間の有意な関連は認められなかった。窃盗は、Bowlby によるアタッチメント理論の出発点となった問題行動であり、Winnicott (1956) が非行少年との関わりを通してその価値を見出した、愛情剥奪と愛情を取り戻そうとする希望のサインである。これらの臨床的な文脈においては、窃盗を行う者とアタッチメントの関連性は言及されている。愛情剥奪からの回復を目指すこの象徴的行為が野放しにされると、二次的な経済的利得のための行動として置き換えられる (Fonagy & Target, 1996) ことがあり、窃盗の背景に潜む心の問題に注目する必要がある。また今村 (2007) は、窃盗の動機として利欲、経済的困窮やスリルの探求、好奇心や恨みなどがあり、一見す

ると直接的な欲求充足行動に見えるけれども、その背後には強い欠乏感が潜んでおり、しばしば生育環境の問題があることを指摘している。

しかしアタッチメント理論に基づく窃盗犯罪者への研究は、あまり見られない。それは日本においても欧米においても同様である。窃盗は軽犯罪であるために、支援の対象になりにくいのかも知れない。窃盗が問題になるのは少年の非行においてであることが多いが、今村(2007)の指摘するように窃盗それ自体はあくまで表層的な問題であり、その背景に注目する必要がある。日本における犯罪の実情に窃盗が強く関与していることを考えると、窃盗犯罪者の背景にある問題をアタッチメント理論の視座に基づいて詳細に研究していくことが必要であると考えられる。

### 3. アタッチメントの観点に基づく 反社会性への支援

ここまで、アタッチメントと反社会的問題との間の関連を概観し、反社会的問題をアタッチメントの視点から理解することを試みた。それらの関連性は必ずしも一致しないものの、反社会的問題を有する者のアタッチメント分類は概して不安定型であることは共通している。それでは、彼らの支援に当たって、アタッチメントの視点はどのように機能しうるのだろうか。そこで本節では、反社会性への臨床的な介入の枠組みとしてのアタッチメントに関する研究を取り上げたい。

Parker & Morris (2003) は、刑務所においてアタッチメントの観点を支援に取り入れる方法を検討した。2人はアタッチメントの問題を有する受刑者がスタッフとどのようにアタッチメント関係を構築していくのかについて、4つの段階を提唱している。第一段階が“illusory attachment”（偽りのアタッチメント）であり、受刑者はスタッフと偽の繋がりを作る。偽というのは、一見すると正しいことや感動的なこと、洞察じみたことを述べるが、実際にはこれまでのスキルを維持しているにすぎず、自らの責任を放棄している状態である。この状態は強固に維持されるので、なんらかの失敗（感情の噴出など）がない限り、本質的なアタッチメントの問題は明らかにならない。この失敗に引き続く第二段階として、“angry attachment”（怒りのアタッチメント）の段階が訪れる。この時期の受刑者は、かつてのアタッチメント対象への怒りや敵意をスタッフに向け、環境を試す意味合いも込められた行動化が生じる。スタッフは非難され、笑いものにされ、心理

療法を行っていたとすればその価値をも貶められる。受刑者はかつてのアタッチメント対象との関係を再現しようと試み、スタッフの攻撃を無意識に予測し、実際にそうさせようと意図した行動や言動をとる。しかしスタッフが彼らを虐待することなく、抑制と公平さをもって、支援者としての自らの限界を認めつつ、アタッチメント対象として「ほどよく」あることを試みれば、この苦痛な時期を超えて、第三段階“secure base”（安心基地）の段階へと至る。かつてのアタッチメント対象とは違う、ほどよい安心基地であるスタッフとの体験は、内的な安心を維持するための探索を促す。しかしその探索の過程はとても険しいものであり、受刑者はスタッフへの依存心、釈放やほかの刑務所への移ることの恐怖などに悩まされる。前進すること、より安定したアタッチメント関係を内在化することの恐怖は、アタッチメント対象の喪失が起こりそうであるという恐怖として語られ、日常の行動と不安に顕著に現れることもある。刑務所やそのスタッフという共同体は彼らが始めて所有する家であり、心理的所有物であり、したがってアタッチメント対象となるがゆえ、その別れにおいて悲しみや怒りを喚起することもある。その悲哀の解決として、共同体とは自ら作っていくものであり、そのために必要な自身の役割を理解することが必要だが、それは容易ではない。受刑者は様々な異なる特別な構造、グループ、共同体、スタッフと受刑者仲間との、多層的なアタッチメント関係を形成する。進展のための別れや悲しみが味わわれ、準備され、自らの人生をスタートさせていく段階である。

このように Parker & Morris (2003) は、受刑者がスタッフとアタッチメント関係を築く上で、スタッフが受刑者にとっての安心基地として機能することを重視している。Adshead (2003) も司法施設における安心基地の役割に注目している。刑務所で遭遇する不安や脅威により、受刑者はアタッチメント行動を活発化させるが、受刑者をさいなむ幼少期の養育者との体験、トラウマや未解決な気持ちは、その解決が提供されなかったがために、治療者やスタッフによる受刑者への慰めや暖かみや優しさは軽視され、損なわれ、憎しみによって利己的に搾取されるのみとなる。そうした受刑者の関係の取り方を、Adshead (2001, 2003) は“toxic attachment”（有毒なアタッチメント）と表現している。防衛された世話されることや世話することの欲求や、離れがたさ、関係への欲求が生じ、スタッフとの安心感を経験するための時間を強く求めるようになる。このとき、スタッフが過度な負担を感じないた

めに、スタッフに対する安心基地もまた用意されている必要があり、司法施設では複数の水準での安心基地が不可欠なのであろう。

治療者が犯罪者に対して、安心基地として、彼らの心の状態を感じ、応じることで犯罪者のアタッチメントの問題に変化をもたらす可能性があることは指摘されている (Ansbro, 2008; 工藤, 2012; 森田, 2012)。Ansbro (2008) はアタッチメント関係それ自体が治療におけるひとつの道具である可能性を示唆することで、そして工藤 (2012) は元受刑者の心的問題の解決が環境 (とりわけ彼らに関わる治療者) に求められていることを描き出すことで、犯罪者の支援において彼らの心的問題を扱う治療者の機能としての安心基地の重要性を指摘している。McGauley (2011) や Bateman & Fonagy (2012) によるメンタライゼーションに基づく治療においても、患者が治療者に対して安心感を抱くことができるように援助することは不可欠な要素であり、それはしたがって治療者が安心基地として機能することの重要性を示唆している。受刑者の80%に被虐待経験があることを重視した Huffman (2013) は、トラウマが個人の精神世界に与える影響力を強調し、治療の焦点は取り扱われなままになっている外傷体験にこそ当てられるべきだと述べており、それを支えるものが治療者との安心できる関係であると思われる。

#### 4. まとめ

##### 4-1. アタッチメントと反社会性の関連

本稿では、アタッチメントと様々な反社会性との関連を概観し、次いでアタッチメントの観点に基づく反社会性への治療に関して取り上げた。それらの結果については各節の結語で取り上げたので繰り返さないが、それぞれの関係性を Table 2 にまとめた。全体を通して、アタッチメントに基づく反社会性の理解について、各反社会性を見てもそれほど一貫していないように思われる。それはアタッチメントを測定する測度の限界や、犯罪者という一群におけるアタッチメント状態の複雑さを示唆しているのかもしれない。しかし先行研究において重要なアタッチメントの要素として位置づけられていたのは、幼少期の養育者との関係や、アタッチメント分類あるいはアタッチメント・スタイルであった。またそのようなアタッチメント分類などを測定し、犯罪者の傾向を理解する研究はある程度揃ってはいるものの、それが彼らの治療や更生とどう結びつくのかに関する実証的な研究はあまりないようであった。そ

れらの研究は、犯罪に繋がる基盤としてのアタッチメントの問題をある程度示すことに留まっている。

一方、それらの研究の多くが、犯罪者の被虐待経験や心的外傷の影響を指摘していることには注目すべきだろう。本稿ではアタッチメントと反社会性の関連性を描き出すことを目的にしていたが、Greenberg, Speltz, & Deklyen (1993) は、不安定なアタッチメントは反社会的行動が進展していく危険因子であるものの、犯罪に至る唯一の要因ではないことに注意を喚起している。環境との相互作用を通して個人のアタッチメントが組織化されていく上で、被虐待経験の影響力は非常に強いものであり、また反社会性についても同様に、アタッチメントの要因のみで犯罪者の傾向を理解することは困難であるように思われる。

##### 4-2. 犯罪者の臨床における安心基地の役割

アタッチメントに基づく犯罪者への支援においては、どの研究者も安心基地を中核に論じているようである。刑務所においてもグループ療法においても個人療法においても、治療者という安心基地が彼らの心を汲み取ることで、犯罪者は自身の心にも開かれていくことが (ことさらに苦難な道のりではあるけれども) 期待される。犯罪者の更生や治療に安心基地が不可欠な要素であるならば、そもそも犯罪に至ることや犯罪に至らずにすむことについても、安心基地の観点から考えていく必要があるのではないだろうか。例えば性犯罪や物質使用について共通しているのは、何らかの苦痛に対する対処としての支配や快感や物質への依存であると思われるが、安心基地の観点から考えてみると、そうした苦痛に対する安心基地が得られないことが彼らの問題行動に拍車をかけているとも考えられる。それは彼らに、安心基地を利用する能力が十分でないという問題があることを示しているのかもしれない。さらに暴力やストーキングの場合、とらわれない過剰な接近探索、軽視的な関係からの撤退や支配は、安心基地との関係を損ない、彼らをより孤立させていくかもしれない。暴力は安心基地を破壊するだろうし、そもそも安心基地となりうる対象との関係の形成、発展や維持を阻害し、いつまでも安心基地を得られることなく、自らの身体に刻まれた暴力の記憶を、暴力の中で反復し続けることになるかもしれない。その反復に歯止めをかけ、自身の傷つきを取り扱ってくれる対象として、本来的に求められているのが安心基地であるとしても、そして彼らの反社会的傾向や行動が安心基地を求める行動であるとしても、それが反社会的なものであり、

Table 2. 各反社会性とアタッチメント、および心的状態や経験との関連性

反社会性	関連するアタッチメント状態	注目される心的状態や経験
反社会性パーソナリティ障害	AAI 軽視型、未解決・分類不能型、とらわれ型、 いずれも一定の関連を示すが、研究ごとに相違 質問紙 恐れ型、軽視型、とらわれ型 アタッチメント不安因子	幼少期の親の力の行使、被虐待経験、メンタライゼーションの問題、恥、屈辱感、怒りなど
親密な関係における暴力	AAI 軽視型、とらわれ型、未解決・分類不能型、 いずれも一定の関連を示すが、研究ごとに相違 とらわれ型：関係の喪失を恐れる暴力 軽視型：自己主張的、支配的な暴力 質問紙 軽視型、恐れ型 アタッチメント回避因子	拒否的・強圧的な被養育経験、攻撃性の発達の失敗、メンタライゼーションの問題、対象の喪失の回避、家族への暴力が家族以外への暴力かによる差異など
殺人	AAI 分類不能が多い	被虐待経験、あまりにも極端な幼少期の経験、リフレクティブ・ファンクションの弱さ、精神疾患、認知的損傷、抗精神病薬など
性犯罪	家族外児童への性的わいせつ者 とらわれ型が多い 家族児童への性的わいせつ者と強姦者 軽視型が多い	被性的虐待、ネグレクト、性的・攻撃的空想、幼少期における性的な体験への暴露、情緒的孤立など
ストーキング	とらわれ型が多い 接近を強く求める	自己愛的な空想、恥、恐れ、怒り、迫害感の強さ、精神障害の程度など
物質使用	AAI とらわれ型が多い 質問紙 軽視型が多い 不安因子が高い	精神的・対人的問題を補償、葛藤の一時的な解消など
窃盗	親との適切なアタッチメント関係の乏しさ	愛情剥奪、愛情を取り戻すための象徴的行為、強い欠乏感など

対象を傷つける作用を有しているがゆえに、安心基地の獲得を不可能にしてしまう。このように安心基地との安定した関係を結ぶことが犯罪からの保護因子となるのであれば、犯罪者の安心基地の利用に関する実証的研究が必要となってくるだろう。

#### 4-3. 今後の展望

したがって今後の展望として、1) アタッチメント分類によって犯罪者の傾向を捉えるだけでなく、実際の治療や更生の中で、アタッチメント分類がどのように彼らの問題に影響し、そして支援に影響するのかを

探っていく必要があるだろう。さらに 2) アタッチメントによる反社会性の理解においても支援においても、安心基地という対象との関係からの研究が必要になるものと考えられる。安心基地が犯罪者の治療や更生にどのような役割を演じるのか、安心基地を利用する能力を犯罪者がどの程度有しており、それは治療や更生にどう影響するのかということについて、ある程度長期的な期間を設けて検討していく必要があるだろう。長期的なというのは、犯罪者の病理は犯罪という行動で反復されるためであり、累犯や再犯と呼ばれるような問題を引き起こすためである。

## 注

1) リフレクティブ・ファンクション得点は、心的状態への言及、心的状態の特徴への感受性、心的状態の複雑さと多様性への感受性、心的状態を観察された行動に結びつける特別な努力、心的状態の変化の可能性の、対応する行動上の変化の示唆を含めた評価、などの程度により評定される、心理的状态を理解する能力を反映した尺度である (Fonagy, Steele, Steele, Leigh, Kennedy, Mattoon, & Target, 1995)。

## 引用文献

- Abracen, J., Looman, J., Di Fazio, R., Kelly, T., & Stirpe, T. (2006). Patterns of attachment and alcohol abuse in sexual and violent non-sexual offenders. *Journal of Sexual Aggression*, **12**(1), 19-30.
- Adshead, G. (2001). Attachment in mental health institutions: a commentary. *Attachment & Human Development*, **3**(3), 324-329.
- Adshead, G. (2003). Three degrees of security: Attachment and forensic institutions. In F. Pfafflin. & G. Adshead (Eds.), *A Matter of Security: The Application of Attachment Theory to Forensic Psychiatry and Psychotherapy (Forensic Focus)*. Jessica Kingsley. pp.85-105.
- Ainsworth, M. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Walls, S. (1978). Patterns of attachment: A psychological study of the Strange Situation. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- American Psychiatric Association. (2013). *Diagnostic and statistical manual of mental disorders: Dsm-5*. American Psychiatric Publication.
- Ansbro, M. (2008). Using attachment theory with offenders. *The Journal of Community and Criminal Justice*, **55**(3), 231-244.
- Ayoub, C. C., Fischer, K. W., & O'Connor, E. E. (2003). Analyzing development of working models for disrupted attachments: the case of hidden family violence. *Attachment & Human Development*, **5**(2), 97-119.
- Baker, E., Beech, A., & Tyson, M. (2006). Attachment disorganization and its relevance to sexual offending. *Journal of Family Violence*, **21**(3), 221-231.
- Bakermans-Kranenburg, M. J., & van IJzendoorn, M. H. (2009). The first 10,000 Adult Attachment Interviews: Distributions of adult attachment representations in clinical and non-clinical groups. *Attachment & Human Development*, **11**(3), 223-263.
- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: a test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**(2), 226-244.
- Beauregard, E., Lussier, P., & Proulx, J. (2004). An exploration of developmental factors related to deviant sexual preferences among adult rapists. *Sexual Abuse: Journal of Research and Treatment*, **16**(2), 151-161.
- Bogaerts, S., Vanheule, S., & Desmet, M. (2006). Personality disorders and romantic adult attachment: a comparison of secure and insecure attached child molesters. *International Journal of Offender Therapy and Comparative Criminology*, **50**(2), 139-147.
- Bowlby, J. (1946). Forty-four Juvenile thieves: their characters and home life. *International Journal of Psycho-Analysis*, **25**, 19-52 and 107-127.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and Loss, Vol. 2 Separation: Anxiety and Anger*. New York: Basic Books.  
(ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1977/1991). 母子関係の理論Ⅱ 分離不安 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1980). *Attachment and Loss, Vol. 3 Loss: Sadness and Depression*. New York: Basic Books.  
(ボウルビィ J. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子 (訳) (1981). 母子関係の理論Ⅲ 対象喪失 岩崎学術出版社)
- Bowlby, J. (1984). Violence in the family as a disorder of the attachment and caregiving systems. *The American Journal of Psychoanalysis*, **44**(1), 9-27.
- Bowlby, J. (1988). *A Secure base: clinical application of attachment theory*. London: Routledge.  
(ボウルビィ J. 二木 武 (監訳) (1993). 母と子のアタッチメント 心の安全基地 医歯薬出版株式会社)
- Brennan, K. A., Clerk, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self report measurement of adult attachment; An integrative Overview. In J.A.Simpson & W.S. Pholes (Ed.), *Attachment Theory and close relationships*. New York: Guilford Press. pp.46-76.
- Brennan, K. A., & Shaver P. R. (1998). Attachment Styles and Personality Disorders: Their Connections to Each Other and to Parental Divorce, Parental Death, and Perceptions of Parental Caregiving. *Journal of Personality*. **66**(5), pp.835-876.
- Brook, J. S., Whiteman, M., & Finch, S. (1993). Role of mutual attachment in drug use: A longitudinal study. *Journal of the American Academy of Child and Adolescent Psychiatry*, **32**(5), 982-989.
- Burk, L., & Burkhart, B. (2003). Disorganized attachment as a diathesis for sexual deviance: Developmental experience and the motivation for sexual offending. *Aggression and Violent Behavior*, **8**, 487-511.
- Dutton, D. G. (2007). *The abusive personality: Violence and control in intimate relationships*. New York: Guilford Press.
- Dutton, D. G., & White, K. (2012). Attachment insecurity and intimate partner violence. *Aggression and Violent Behavior*, **17**, 475-481.
- 遠藤利彦 (2007). アタッチメント理論とその実証研究を俯瞰する 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房 pp1-44.
- Finzi-Dottan, R., Cohen, O., Iwaniec, D., Sapir, Y., & Weizman, A. (2003). The drug-user husband and his wife: attachment styles, family cohesion, and adaptability. *Substance Use & Misuse*, **32**(2), 271-292.

- Fonagy, P. (2003). Towards a developmental understanding of violence. *British journal of Psychiatry*, **183**, 190-192.
- Fonagy, P. (2004). Early-life trauma and the psychogenesis and prevention of violence. *Annals of the New York Academy of Sciences*, **1036**, 181-200.
- Fonagy, P., Leigh, T., Steele, M., Steele, H., Kennedy, R., Mattoon, G., Target, M., Gerber, A. (1996). The relation of attachment status, psychiatric classification, and response to psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**(1), 22-31.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Leigh, T., Kennedy, R., Mattoon, G., & Target, M. (1995). Attachment, the reflective self, and borderline states: The predictive specificity of the Adult Attachment Interview and pathological emotional development. In S. Goldberg, R. Muir, J. Kerr. (Eds.), *Attachment theory: Social, developmental, and clinical perspectives*. Hillsdale, NJ; England/ Analytic Press, Inc. pp. 233-278.
- Fonagy, P. & Target, M. (1996). Personality and sexual development, psychopathology and offending. In Cordess, C. & Cox, M. (Eds.), *Forensic Psychotherapy: Crime, Psychodynamics and the Offender Patient*. United Kingdom: Jessica Kingsley Publishers. pp.117-152.
- Fonagy, P., Target, M., Gergely, G., & Jurist, E. J. (2002). *Affect regulation, mentalization and the development of the self*. New York: NY: Other Press.
- Fonagy, P., Target, M., Steele, M., & Steele, H. (1997). The development of violence and crime as it relates to security of attachment. In J. D. Osofsky (Ed.), *Children in a violent society*. New York: Guilford Press. pp.150-177.
- Fonagy, P., Target, M., Steele, M., Steele, H., Leigh, T., Levinson, A., & Kennedy, R. (1997). Morality, disruptive behavior, borderline personality disorder, crime, and their relationship to security of attachment. In L. Atkinson & K. Zucker (Eds.), *Attachment and psychopathology*. New York: Guilford Press. pp.223-274.
- Frodi, A., Dernevik, M., Sepa, A., Philipson, J., & Bragesjö, M. (2001). Current attachment representations of incarcerated offenders varying in degree of psychopathy. *Attachment & Human Development*, **3**(3), 269-283.
- Greenberg, M. T., Speltz, M. L., & Deklyen, M. (1993). The role of attachment in the early development of disruptive behavior problems. *Development and Psychopathology*, **5**, 191-213.
- 法務総合研究所 (2012). 犯罪白書 平成24年版.
- Hare, R. D. (1993). *Without Conscience: The Disturbing World of the Psychopaths Among Us*. New York: Pocket Books.
- (ヘア R. D. 小林宏明 (訳) (1995). 診断名サイコパス-身近にひそむ異常人格者たち 早川書房)
- Hazan, C., & Shaver, P. (1987). Romantic love conceptualized as an attachment process. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**(3), 511-524.
- Huffman, E. G. (2013). The therapeutic relationship, prison, and responsivity. In J. B. Helfgott (Ed.), *Criminal Psychology Volume 4: Implications for juvenile justice, corrections, and reentry*: Preaeger publication. pp.175-207.
- 今村洋子 (2007). 窃盗 藤岡淳子 (編) 犯罪・非行の心理学 有斐閣 p43.
- Judy, B., & Nelson, E. S. (2000). Relationship between parents, peers, morality, and theft in an adolescent sample. *The High School Journal*, **83**(3), 31-42.
- Kesner, J. E., Julian, T., & McKenry, P. C. (1997). Application of attachment theory to male violence toward female intimates. *Journal of Family Violence*, **12**(2), 211-229.
- Kesner, J. E., & Mckenry, P. C. (1998). The role of childhood attachment factors in predicting male violence toward female Intimates. *Journal of Family Violence*, **13**(4), 417-432.
- Kochanska, G., Barry, R. A., Stellern, S. A., & O'Bleness, J. J. (2009). Early attachment organization moderates the parent-child mutually coercive pathway to children's antisocial conduct. *Child Development*, **80**(4), 1288-1300.
- 近藤日出夫 (2009). 男子少年による殺人：殺人少年73人の類型化の試み 犯罪社会学研究, **34**, 134-150.
- 工藤晋平 (2012). 元受刑者の社会復帰支援におけるアタッチメントの病理と理解 数井みゆき (編) アタッチメントの実践と応用—医療・福祉・教育・司法の現場からの報告— 誠信書房 pp.192-209.
- Lawson, D. M., & Malnar, S. G. (2011). Interpersonal problems as a mediator between attachment and intimate partner violence. *Journal of Family Violence*, **26**(6), 421-430.
- Levinson, A., & Fonagy, P. (2004). Offending and attachment: The relationship between interpersonal awareness and offending in a prison population with psychiatric disorder. *Canadian Journal of Psychoanalysis*, **12**(2), 225-251.
- Main, M & Goldwyn, R. (1994). Adult attachment scoring and classification system. Unpublished manuscript, University of California at Berkeley.
- Marshall, W. L. (2010). The role of attachments, intimacy, and loneliness in the etiology and maintenance of sexual offending. *Sexual and Relationship Therapy*, **25**(1), 73-85.
- Mawson, A.R. (1980). Aggression, attachment behavior, and crimes of violence. In T. Hirschi & M. Gottfredson (Eds.), *Understanding crime. Current theory and research*. Beverly Hills: Sage Publications. pp.103-116.
- McGauley, G., Yakeley, J., Williams, A., & Bateman, A. W. (2011). Attachment, mentalization and antisocial personality disorder: The possible contribution of mentalization-based treatment. *European Journal of Psychotherapy & Counselling*, **13**(4), 371-393.
- Meloy, J. R. (1992). *Violent Attachments*. Northvale, NJ: Jason Aronson Inc.

- Meloy, J. R. (1996). Stalking (obsessional following): A review of some preliminary studies. *Aggression and Violent Behavior, 1*, 147-162.
- Meloy, J. R. (1998). *The psychology of stalking: Clinical and forensic perspectives*. San Diego, CA: Academic Press.
- Meloy, J. R. (2013). Stalking. In J. Siegel & P. Saukko (Eds.), *Encyclopedia of Forensic Sciences: 2<sup>nd</sup> edition, Vol. 1*. Waltham: Academic Press. pp.202-205
- Ménard, K. S. & Pincus, A. L. (2012). Predicting overt and cyber stalking perpetration by male and female college students. *Journal of Interpersonal Violence, 27*(11), 2183-2207.
- 三原理恵 (1999). 愛着理論から見た発達病理と精神病理 東京大学大学院教育学研究科紀, **39**, 327-338.
- 森田展彰 (2012). アタッチメントの観点から見た物質使用障害の理解と援助 数井みゆき (編) アタッチメントの実践と応用—医療・福祉・教育・司法の現場からの報告— 誠信書房 pp.169-191.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004). “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討 九州大学心理学研究紀要, **5**, 19-27.
- Ogilvie, C. A., Newman, E., Todd, L., & Peck, D. (2014). Attachment & violent offending: A meta-analysis. *Aggression and Violent Behavior, 19*(4), 322-339.
- Rapoza, K. A., & Baker, A. T. (2008). Attachment styles, alcohol, and childhood experiences of abuse: An analysis of physical violence in dating couples. *Violence and Victims, 23*(1), 52-65.
- Parker, M. & Morris, M. (2003). Finding a secure base: Attachment in Grendon Prison. In F. Pfafflin. & G. Adshead (Eds.), *A Matter of Security: The Application of Attachment Theory to Forensic Psychiatry and Psychotherapy (Forensic Focus)*. Jessica Kingsley. pp.193-207.
- Roisman, G. I., Holland, A., Fortuna, K., Fraley, R. C., Clausell, E., & Clarke, A. (2007). The Adult Attachment Interview and self-reports of attachment style: an empirical rapprochement. *Journal of Personality and Social Psychology, 92*(4), 678-697.
- Rosenstein, R. S. & Horowitz, H. A. (1996). Adolescent attachment and psychopathology. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 64*, 244-253.
- Shaver, P., Belsky, J., & Brennan, K. (2000). The adult attachment interview and self-reports of romantic attachment: Associations across domains and methods. *Personal Relationships, 7*, 25-43.
- Simpson, J. A., Rholes, W. S., Oriña, M. M., & Grich, J. (2002). Working models of attachment, support giving, and support seeking in a stressful situation. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28*(5), 598-608.
- Smallbone, S. W., & Dadds, M. (1998). Childhood Attachment and Adult Attachment in Incarcerated Adult Male Sex Offenders. *Journal of Interpersonal Violence, 13*(5), 555-573.
- Smallbone, S. W., & McCabe, B. A. (2003). Childhood attachment, childhood sexual abuse, and onset of masturbation among adult sexual offenders. *Sexual Abuse: A Journal of Research and Treatment, 15*(1), 1-9.
- Stirpe, T., Abracen, J., Stermac, L., & Wilson, R. (2006). Sexual offenders' state-of-mind regarding childhood attachment: A controlled investigation. *Sexual Abuse: Journal of Research and Treatment, 18*(3), 289-302.
- Timmerman, I. G. H., & Emmelkamp, P. M. G. (2006). The relationship between attachment styles and Cluster B personality disorders in prisoners and forensic inpatients. *International Journal of Law and Psychiatry, 29*(1), 48-56.
- Tonin, E. (2004). The attachment styles of stalkers. *Journal of Forensic Psychiatry & Psychology, 15*(4), 584-590.
- Turton, P., McGauley, G., Marin-Avellan, L., & Hughes, P. (2001). The Adult Attachment Interview: Rating and classification problems posed by non-normative samples. *Attachment & Human Development, 3*(3), 284-303.
- van IJzendoorn, M. H. (1997). Attachment, emergent morality, and aggression: Toward a Developmental Socioemotional Model of Antisocial Behaviour. *International Journal of Behavioral Development, 21*(4), 703-727.
- van IJzendoorn, M. H., & Bakermans-Kranenbug, M. J. (2008). The Distribution of Adult Attachment Representations in Clinical Groups: A meta-Analytic Search for Pattern of Attachment in 105 AAI Studie. In H. Steele & M. Steele (Eds.), *Clinical Applications of the Adult Attachment Interview*. New York: Guilford Press. pp.69-96.
- van IJzendoorn, M. H., Feldbruggu, J. T., Derks, F. C., De Ruiter, C., Verhagen, M. F., Philipse, M. W., Van der Staak, C. P., & Riksen-Walraven, J. M. (1997). Attachment representation of personality disordered criminal offenders. *American Journal of Orthopsychiatry, 67*. 449-459.
- Wallin, D. J. (2007). *Attachment in Psychotherapy*. New York: Guilford Press. (ウォーリン D.J. 津島豊美 (訳) (2011). 愛着と精神療法 星和書店)
- Ward, T., Hudson, S. M., & Marshall, W. L. (1996). Attachment style in sex offenders: A preliminary study. *Journal of Sex Research, 33*(1), 17-26.
- Wilson, J. S., Ermshar, A. L., & Welsh, R. K. (2006). Stalking as paranoid attachment: a typological and dynamic model. *Attachment & Human Development, 8*(2), 139-157.
- Winicott, D. W. (1956). The antisocial tendency. In *D.W. Winnicott Collected Papers: Through paediatrics to psychoanalysis*. Basic Books, 1958. pp.306-315.